

大正から昭和にかけての建築家の言説 その2

○ 正会員 柏瀬 八峰*1
同 近藤 正一*2
同 張 奕文*3
同 若山 滋 *4

言説にみる建築思潮の構造

【序論】 この論文は前稿で抽出されたキーセンテンスに基づいて、時代と建築思潮の構造を明らかにするものである。

建築家の思想は「建築」だけでなく「言説」に現れており、日本の近代建築が形成された重要な時代である大正から昭和初期にかけての建築家の言説を分析することは、近代性とファシズム、モダンと伝統といった問題に一つの視座を与えることになるであろう。

【言説の分析】 建築思潮の時代的枠組を捉えるため、大正から昭和初期を主要な時代のエポックに基づく切断面で切り、その時における言説の構造を図化する。

ここから、様式論と建築家の職能確立が主題の大正初期(1913-1917)、1919年の議院建築設計競技をめぐり、構造と芸術が主題の大正中期(1918-1919)、1920年に結成された分離派が主題の大正後期(1920-1922)、1923年の大震災と帝都復興が

9-1933)、1934年の中村順平の日本主義とドイツの建築家の言説で幕を開け、ファシズムの台頭する戦時下(1934-1942)の七つの時代の枠組を設定できる。→図1

【言説の構造】

1) 初期様式主義 大正2-6年(1913-1917)

大正初期は、様式の「過渡時代」であり、西洋の直輸入が批判され、和洋折衷が主流となり、日本風と西洋風に二極化する住生活の中で、新しい様式が模索された。様式相対主義が時代思潮を支配し、実用と構造と芸術の「三位一体」の建築美学が時代の主流であった。

建築士会の設立に象徴される建築家の職能確立が国家的課題であり、折衷主義を乗り越えるものが「科学」を基礎に置いた建築様式であるとの予感が、大正初期の建築家の共通した時代認識であった。→No.1

2) 都市と様式 大正7-8年(1918-1919)

大正中期も、建築家の職能確立を主題とする「様式主義」が支配的であったが、住宅改良の機運が高まる中、「都市」を主題とする「構造派」が台頭する。

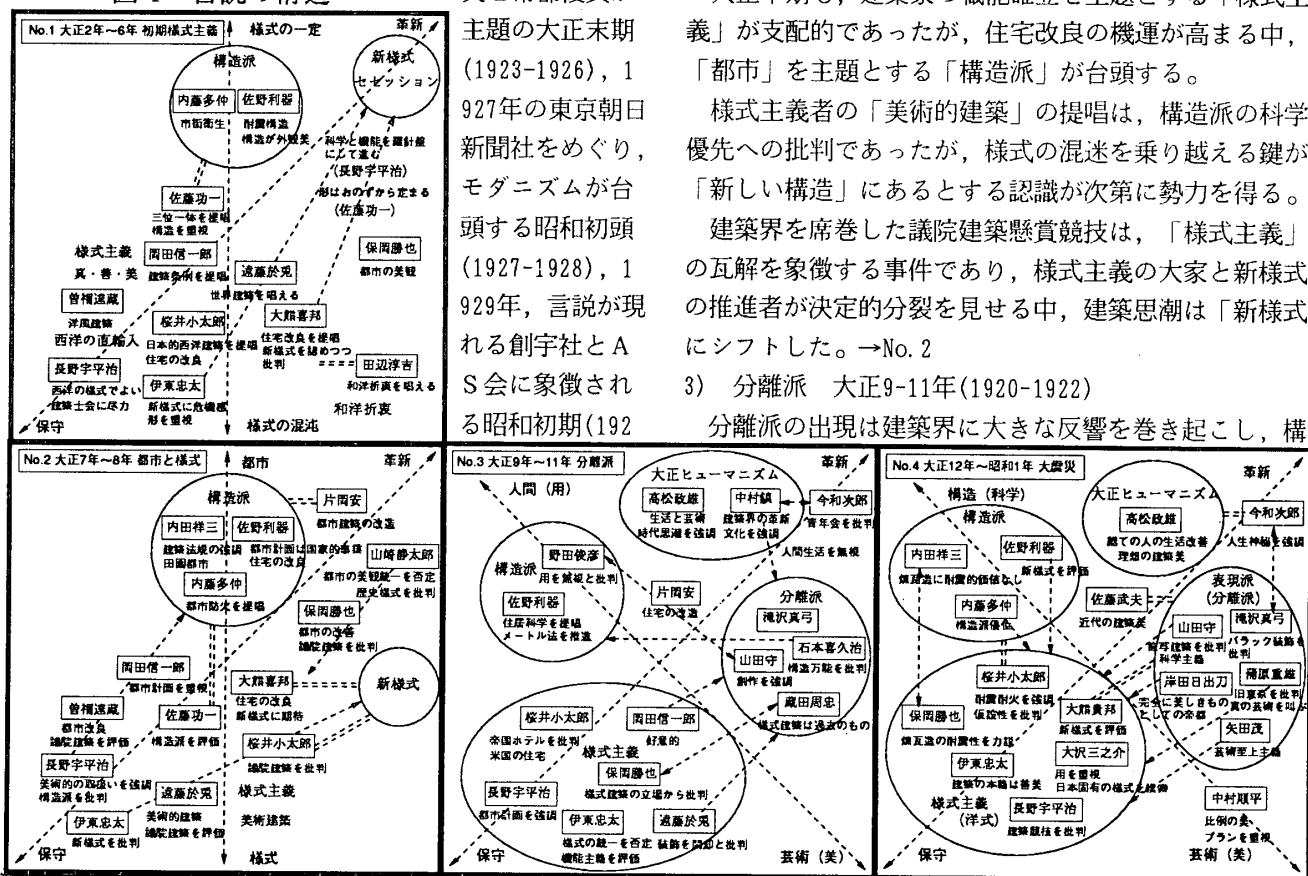
様式主義者の「美術的建築」の提唱は、構造派の科学優先への批判であったが、様式の混迷を乗り越える鍵が「新しい構造」にあるとする認識が次第に勢力を得る。

建築界を席卷した議院建築懸賞競技は、「様式主義」の瓦解を象徴する事件であり、様式主義の大家と新様式の推進者が決定的分裂を見せる中、建築思潮は「新様式」にシフトした。→No.2

3) 分離派 大正9-11年(1920-1922)

分離派の出現は建築界に大きな反響を巻き起こし、構

図-1 言説の構造



Discours of Architects from period of Taisho to Showa part 2

Structure of Architectual thought on discours

KASHIWASE Yatsumine, KONDO Shoichi, ZHANG Yiwen and WAKAYAMA Shigeru

造派は主として実用主義の観点から、様式主義者は主として「美術建築」の観点から、大正ヒューマニズムは、「人間生活」を重視する立場から批判した。

これに対する分離派の反論は、構造派に対しては「芸術」を強調し、様式主義に対しては「西洋直写」を批判した。この複雑な四極構造は大正後期の建築思潮を鮮やかに反映している。→No. 3

4) 大震災と帝都復興 大正12-昭和1年(1923-1926)

震災は建築界を文字通り震撼させた。これは大正期の建築思潮の一大エポックをなすものであり、「煉瓦造」の耐震的価値は否定され、構造派優位が確立した。ここに、様式主義から、構造派へとシフトする建築界の地殻変動を見ることができる。

分離派など新世代は「芸術」をクローズアップし「西洋の直輸入」として「様式建築」を批判する。ここに「構造派」と「芸術派」の二極対立の構図が展開し、様式主義の建築観は大きく後退していく。→No. 4

5) モダニズムの夜明け 昭和2-3年(1927-1928)

昭和初期の建築思潮は、科学(合理主義)と芸術(表現主義)の分裂のはざまに立つ分離派が後退し、創宇社とAS会の出現を見て急速に科学主義への傾斜を強める。

建築論は大正期とは異なり、「建築自体」よりもイデオロギーを軸に展開する。大正ヒューマニズムのキーワード「人間」に代わって「科学」が華々しく登場し、モダニズムが建築思潮の主流になりつつあった。→No. 5

6) 創宇社・AS会 昭和4-8年(1929-1933)

昭和初期の言説を特徴づけるのは、山口文象の創宇社と川喜田煉七郎のAS会であった。そこでは純粋な「客観性」や、ザッハリッヒカイト(事物性)が提唱され、大正期の「建築の合理化」は大正初期に「生活の合理化」へと進展し、「生活最小限の住居」が最大のテーマとなった。→No. 6

7) ファシズムと建築家 昭和9-17年(1934-1942)

昭和初期の建築思潮でとりわけ注目すべきは、戦火に

向かう最中に、ル・コルビュジェを初めとする「新興建築」の泰斗の言説の紹介と、日本の伝統的な住まいの再発見がなされたことである。

住宅の合理化が建築界のエポックであり、「乾式構造」が推進された。多くのモダニストの日本回帰は、「民家」の発見や「真の日本の様式」の提唱に象徴され、戦時体制は建築家の「国策」への接近をもたらした。→No. 7

【結論】 大正から昭和初期の建築思潮は一般には構造派と様式建築の対立、分離派、ファシズムとモダニズムの対立で語られることが多い。

しかし本研究によれば、様式主義と構造派は、国家的課題をめぐって相補的關係にあり、モダニズムの批判は専ら様式主義に対してであり、ファシズムに対してではなかったことが明らかになった。

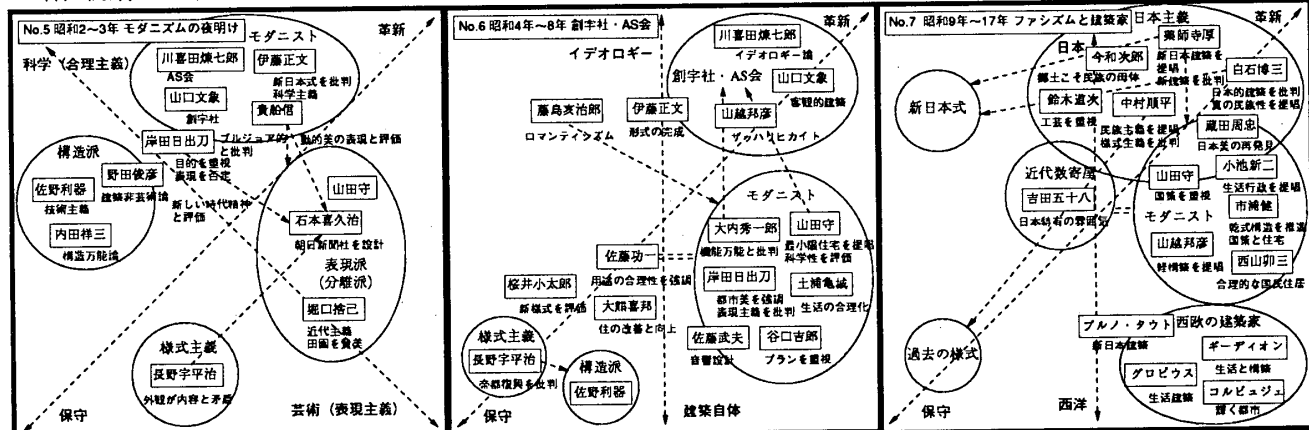
大正期の様式主義と構造派の位相は、前者が建築家の職能確立を、後者が住宅都市の改良を至上命題とし、国家的課題として通底するものであった。日本の様式主義の特異性は「形」の軽視と「用」の重視であり、様式の一定は「科学」に依るとしてモダニズムを予期させるものであった。

分離派は様式主義を「西洋直写」と批判し「創作」を強調するが、それは「日本」の発見であり、「モダニズム」と「日本回帰」はまさに同時に起こったといえる。

建築思潮は、時代を象徴する論客の大きな影響下に展開し、大正後期は、大正ヒューマニズムの建築思潮に彩られ、その人間中心の理想主義は、震災後の「理想的帝都」をめざす新しい芸術派の形成にも影響を与えた。

昭和初期モダニズムの特異性は「表現」を否定する「科学主義」であり、建築思潮は、AS会に象徴されるイデオロギー論に移行し、建築自体から乖離し、建築と建築論は決定的分裂を見せる。

モダニストの「新日本式」への批判は、「民族性」ではなく「非合理性」に向けられ、「真の日本建築」を提唱するという顕著な特色があることが解明された。



- *1 修士
- *2 名古屋工業大学助手・修士
- *3 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士
- *4 名古屋工業大学教授・工学博士

Master Eng.
 Asst., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
 Dr.'s course, Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
 Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.